継母と女教師と僕

高村マルス
挿絵／羽津樹

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　女教師の下半身指導室……4
第二章　継母の淫らな指……56
第三章　痴熟女たちの肉棒矯正具……111
第四章　家庭訪問・淫らな肉特訓……175
第五章　露出美少年・野外恥辱射精……232

登場人物 *Characters*

結城 聖美
(ゆうき きよみ)

男子校・私立黒金高校の校長の娘で、創立者の曾孫。厳しい生徒指導で、生徒たちに恐れられている、きつい美貌の女教師。弱冠三十四歳にして、国語の教科主任も務める、ひかるのクラスの担任。

野原 沙也
(のはら さや)

ひかるの父親の再婚相手で彼の継母。夫が急死したあともひかるを引き取りつつ、その美貌を活かし、高級クラブのホステスとして、女手一つで彼を育てている。会社社長のパトロンと肉体関係あり。

野原 ひかる
(のはら ひかる)

私立黒金高校の二年生。産みの母親を幼いころに事故で亡くし、父も沙也と再婚したのちに急死し、沙也に引き取られる。大人しく中性的な容姿のため、学園の男子生徒から悪戯の対象にされることも。

もちろんこのツボを捉えた細かい刺激のやり方は、どんなに繰り返しても射精まではいかない。だが、ひかるにとっては羞恥と快感が重なってこのときほど感じたことはなかった。

「はうぅ……せ、先生ぇ……」

ひかるは艶のある長い髪を振り乱した。髪はわずかに天然パーマで、それがまた可愛い。聖美の卑猥に笑う妖しく美しい顔を見ながら、ペニスへの玩弄をマゾっぽく味わった。

「あら、可愛いM男君の顔になってるじゃない。うふふ、おチンボがピクッ、ピクッと起きて、もっと嬲(なぶ)ってイカせてって言ってるみたいよ」

聖美はS女らしくひかるを辱めて興奮させることを言うと、親指と人差し指で輪をつくるようにして肉棒の根元を握った。

そうやって陰湿に射精を封じた状態で、手の平で真上から円を描いて亀頭を擦って刺激する。

さらに、指三本で亀頭をつまんでねじでも回すように弄った。

「くっはぁああああっ！」

敏感な亀頭を弄り抜かれても射精しない寸止めイキ地獄に陥っていく。

肉棒の胴を強く握って充血させたり、上から肉棒を押さえて倒した状態で亀頭を玩弄した。仮性包茎だからそこが特に敏感で刺激に弱いと踏んでの手コキテクなのか、聖美はとにかく亀頭を刺激し続けた。

様々なやり方の愛撫が終わったとき、ペニスは熱く勃起し、先っぽの亀頭部は固くはち切れそうになっていた。

ひかるは「あふぅ」と辛そうな溜め息をつく。聖美を見下ろして、懇願する眼差しを向けた。

「ああ、もう、無理ぃ……。お、おちんちんがぁ……あうっ、こわれるぅ！」

「そうでしょう。自分でシコシコしたらだめよ。まず女に触られて、直接女を感じて勃起して。それから……うふふ、あとは言えないわ」

あとは言えないとは、多分射精させるということだろう。ここまで感じさせられ、勃起させられて射精はおあずけなんて、ひかるには考えられなかった。

ひかるは聖美の開いた股間を見ていて、総レースショーツに大きな楕円の染みができていることに気づいた。愛液の染みであることは間違いない。

最初恥裂が分かるだけだったのが、興奮して二枚の肉襞が膨らんで開いたらしく、その形状までレースに透けて露呈していた。

ひかるを玩弄しているうちに自らも興奮した結果だった。女の恥ずかしい事実がそこにあった。

ひかるはそれを本人に言っていいものかどうか迷いながらもじっと見ていた。

（聖美先生、僕をいじめながら、自分も感じてるなんて……）

女の媚肉をレース越しに凝視する。

聖美はその視線に気づいたのか、すっと脚を閉じた。それは聖美が見せた羞恥の一瞬に違いなかった。

「もう一度、脚で懲らしめます。ストッキングの脚で擦ってお仕置きするわよ。あくまでお仕置きなんだから、感じちゃだめ」

聖美は愛液に気づいているはずだが、そのことは何も言わず、気を取り直すように、妙に茶目っ気を感じる言い方をしてきた。

なんと聖美はひかるの前で脚を高く上げると、膝の裏で肉棒を挟んできた。

「あひぃ」

脚を曲げて肉棒を挟んで圧迫し、そのままの状態を維持して、「どう？」と問うてくるような眼でひかるを見る。

一見細く見えても肉付きのいい腿で挟まれると、肉棒全体が腿とふくらはぎの肉の

圧迫を受けて気持ち良かった。
聖美がひかるの肩に寄りかかって、ランジェリーを纏った肢体をべたっと華奢な身体に密着させてくる。それがまたうっとりするほど心地良い。
「せ、先生、こんな脚で挟むお仕置きなんてあるんですか？」
「そうよ。こうやって、ぐーっと……」
手で握るように膝の裏で挟んでおいて、前後に膝を動かし始めた。
「ストッキングが、あう、ざらざらして……なんか……」
「なあに？　ざらざらして気持ちいいの？　だめよ、感じちゃ」
「だって」
聖美は口を真一文字に閉じている。膝を上げたままの姿勢をとっているので、その疲労に耐えているように見えた。身体のバランスを崩さないようにひかるの腰に手を回して、しっかり横から抱きついてくる。
（こんなお仕置きなんてありえない！）
そうは思うが、ひかるの肉棒は膝裏の固さと腿の肉による締めつけで、ドクンと脈打つ充血勃起状態だ。厳格な女教師による校則違反の口実を使った脚コキのセクハラに舞い上がってしまった。

ストッキングを通して肉棒に伝わる腿の皮膚体温は生々しく意外に興奮させられる。甘い体臭はS女でも誘惑的。そして目の前でじっと見つめる責めの視線は、M美少年の官能をくすぐらずにはおかない。

モデル並のプロポーションの女教師が淫らな言葉とS女のテクニックで性教育する。ストッキングに包まれた美脚で少年の敏感な肉棒を刺激し続けた。

聖美はしばらく脚コキして疲れると、上げていた脚を下ろした。

ひかるは椅子に座らされた。

「女のパンティみたいな下着穿く子は、男の子としてしっかりするように教育し直さなきゃいけないわ」

「は、はい」

「それには、うふふ、こうやって先生の柔らかいところ押しつけたりして、女を感じさせなきゃ」

聖美はひかるの横に来て少し屈むと、顔を自分のほうに向けさせた。

何をする気だろうと思っていると、バストを顔に押しつけられた。

「あう」

ひかるはレースのブラ越しに聖美の乳房の弾力を感じた。柔らかいと言おうと思っ

たが、気が引けて言えなかった。
口には出して言えないが、女教師の乳肉の柔らかさには、責めと快感と卑猥さが交錯した不思議なS女の愛を感じて、うっとりさせられた。
ひかるは唇で乳首の感触も感じている。しこっているのか、ちょっと固かった。
聖美は顔から乳房を離すと、また正面にしゃがんだ。
ひかるは肉棒を五本の指でしっかり握られた。
「うあぁ」
ギュッ、ギュッと、繰り返し強くしごかれていく。
聖美の握る力は強く、上下にしごくスピードも加速してきた。ペニスの快感が徐々に積み重なってくる。
「あっ……出……るっ……」
もう一息で発射というところで、手の動きがピタリと止まった。
聖美がひかるの眼を見つめる。
「どうしたの、もう、イクの？」
そう聞いて顔を見上げてくる。
いったん握る手を離し、今度は肉棒の根元だけ指でつまんだ。そしてゆっくり力を

入れて尿道の膨らみを圧迫した。
「くくぅ」
「うふふ、感じた顔しちゃって」
そう言って眼を細めて反応を見る。
ひかるは聖美の玩弄物と化しつつある己がペニスを恨めしく見つめた。濁液がすでに尿道を上昇し始めているというのに、根元を親指と人差し指でギュッとつままれて射精を止められている。その狂おしさ。生殺しの快感。切ない顔になって小さな顎が上がってくる。
「あうーん！」
矯声とともに身体が一瞬伸び上がった。
聖美は上を向いたペニスを握って、少し揺すった。
「こんなに固く勃起しちゃって……。女の子みたいな声上げないのよ」
そう言って両手の指先で横から根元を押さえ、グッ、グッと、どこまでペニスの根っこが深いか確かめようとした。
「あっ、ちょっと、そんなふうにしないでぇ」
ひかるは陰嚢の中まで指を食い込まされた。そのペニス基底部への刺激は今まで感

じたことがない。オナニーはしているが、ここまで深くペニスを弄ったことはなかった。
「何が『しないで』よ。おチンポピクついてるじゃない」
「で、でも、そんな深いところは……あぁー」
聖美は陰嚢の中に親指と人差し指をめり込ませて、陰嚢上部の中に隠れているペニス茎の固い根元をしっかりとつまんだ。
今まで感じていた快感とは別種の、股関節やアナルにも刺激が伝わる深い快感が生じていた。ひかるはそれを聖美に正直に言いたい気持ちにかられた。
聖美はそんな快感を見抜いているのか、じっと顔を見て笑みをこぼし、根元だけや強くつまんで細かく何度もしごいた。
指が深く陰嚢にめり込んできた。
「た、玉のほうが……アァッ！」
一瞬グリッと、睾丸から伸びる管のようなものに指先の圧迫が加わった。疼痛が襲ってひかるは顔を歪めた。
「あら、ごめんなさい」
聖美は悪戯っぽい笑みを見せて、間もなく指を離した。

「ペニスは根っこが深くて、しっかり支えられているから、女のあそこにズボズボ突っ込むことができるのよね」
「お、お仕置きじゃなかったんですか？　最初言ってたことと違ってきてます」
「いいえ、これがお仕置き。そして性教育なの。うふふふ」
聖美は痴女の歪（いびつ）な笑みを満面にたたえて、また五本の指で肉棒を包み込み、固く握りしめてきた。
「さっきも言ったように、男の子として鍛えるためもあるわ。あなたのペニスは仮性包茎でも大きいし、固く勃起するわ。でも、心はどうかしら。男らしくなるように鍛えてあげる」
男らしく鍛えるなんて嘘。反対に羞恥心を植えつけて、羞恥と快感で翻弄してイカせ、満足させて言いなりにさせようとしている。それは明らか。ひかるには分かっている。
だが、聖美はあくまで鍛えるためだと言い、ひかるのペニスを念入りにしごいていく。亀頭の裏を二本の指でおいでおいでをするように撫でて感じさせ、もう一方の手の指で亀頭の上側の広い面もくすぐっていく。
「クッ……クゥウッ！」

肉棒全体をしごく射精へつながる快感ではなく、亀頭のみの苦しくなるような快感で上体が揺れ、ひかるは白肌の華奢な身体をよじった。

聖美は親指と人差し指で亀頭環状溝をぐるり囲んで首を絞めるように握った。亀頭をブックリ充血させて膨らませ、カリ首のところを上へと擦り上げる。

「そ、そんなことやって、男らしくなんてなるの？」

ひかるは擦り上げられるたび感じる強い快感で腰が浮き上がった。

「ならないって言うの。いいから、あなたは黙って先生にされるままになってなさい」

聖美は尿道口を指先でこちょこちょとくすぐった。それも強い刺激になる。十本の指を全部使って肉棒全体を縦横無尽に弄り回した。

「はぁあうぅぅっ……ど、どこまでやるのぉ……はぐぅぅ！」

女教師の繊細な指とマニキュアを塗った爪が、敏感化したペニスを刺激し続ける。尿道の奥がジュッと熱く高まった。カウパー液が尿道内を上昇してきたのだ。

何度もひくつき、何度も粘液を漏らす。それでも聖美の十本の指はひかるのはち切れんばかりに充血した肉棒に絡みつく。細長い指が肉棒本体にまとわりついて、感触がうずうずと心地良い。

カウパー液は赤い尿道口から狂おしく吐き出され、聖美の指とひかるの肉棒がとも

にネットリとしてきた。
「ひかる君、今から射精させます」
聖美に落ち着いた声で言い渡された。
「しゃ、射精ぃ……やめてぇ！」
思わず聖美の眼を見てしまう。男子生徒を射精させると言ってのける女教師の言葉は卑猥で背徳的。手コキ射精は予想していたこと、否、ひかる自身望んでいたことである。とは言え、じっくり言い渡されると、ひかるは羞恥と狼狽の体を晒してしまう。
「あなたのようなエッチな男の子は、おチンポが勃起してカウパー垂らしたまま下校したら、一般の人と間違いを犯しかねないわ。可愛いから男の人とズボッとやったりして……。先生はそんなこと認めません」
聖美は断固とした口調で言った。
「ああーっ！」
ひかるの肉棒は淫乱女教師の手で捕捉され、ギュッ、ギュッと前後に素早くしごかれていく。包皮が下がったり上がったり。
「だめぇぇ……僕、も、もう！」
反り返ったペニスを強い性刺激が駆け抜けた。前立腺収縮へと昂る。

「ほらっ、出すのよ！　先生の前で、おチンポから思い切りよ――」
聖美が急かす。ひかるは一瞬射精をこらえた。
だが、強烈な快感が尿道深部から先端へと突き抜ける。
「あうあぁ、で、出ちゃう！　あ、あああああぁーん！」
精液がペニスから白い尾を引いて飛び出した。愛らしい口を大きく開けて、啼き上げる。
堰き止められていた濁液が尿道内を駆ける。その超絶快感でひかるは白眼を剥いてビクンと身体を跳ねさせた。
聖美は教え子の屈辱射精を鋭利かつ淫美な眼差しで凝視し、口元に満悦の笑みを浮かべていた。
聖美は無言でひかるの肉棒をしごき続ける。
ドビュッ、ビュッ、ドピュピュッ……。
「イ、イクゥッ！」
ひかるは狂おしさを満面に表して啼き、背をのけ反らせ、全身を強張らせた。何度もしごき出され、息も絶え絶えで発射し続ける。
「はぐうぅぅぅっ！」

沙也はセックスすることを当たり前のように言う。熟女の性欲暴走にはもはや歯止めはかからない。ひたすら発情していく。

ひかるは何も言えなかった。沙也が跨がってくるのをただ見ているしかない。

沙也はひかるのほうを向くと、下腹部を跨いだ。屹立した肉棒の真上に沙也の股間がある。

恥骨が大きいのか、肉の丘は形良く盛り上がっていた。黒々としたヘアーはそんなに猥褻感はない。綺麗な楕円である。

腰を落としていきながら、手を下に伸ばし、勃起した肉棒を握った。

赤く熟した媚肉は淫欲を表す愛液にまみれて濡れ光っている。その周囲にちょっと固そうな毛がまばらに生えているのが卑猥だ。

股を開いたため媚肉が口を開け、プンと甘い雌臭が漂った。さらに二枚の襞びらが左右に飛び出してきた。

襞びらの間に、亀頭を宛がう。

「はうっ……」

ひかるは敏感な亀頭海綿体に、うずうずする膣襞の感触を受けた。

「おチンポをママの中に入れるわよ」

眼を合わせ、わざわざ口に出して言う。
腰をゆっくり沈めていく。
勃起してピクピク感じているひかるの肉棒に、母親である沙也の体重がかかってきた。
「あう、あ、あっ……は、入っちゃうー」
ずぶっと、亀頭からペニス本体まで沙也の体内に没した。
膣襞が亀頭からペニスの根元まで絡んでくる。
「くはぁ……」
ひかるは今、犯された気持ちになっている。マゾ的な興奮の熱で身体が火照ってきて、敏感な仮性包茎の肉棒で継母の膣肉を味わっている。
にちゃっと舐めてくるような膣内の襞の感触。亀頭海綿体で今、如実に感じている。
セックスの経験は沙也としかないが、その膣襞が並でない気持ちよさだと思っている。沙也も名器だとよく言われると口にしていた。
「ああう、ママの、ひ、襞が亀頭の周りの溝のところに、ねちゃっとぉ……。ざわざわ絡んできて、僕のおチンポを奥に引き込むみたい。あう、締まるぅ……」
ひかるが喘いで言うように、沙也の膣襞は侵入物に対して細かく蠢きながら絡みつ

いて、そして引き込む。肉壁もクイッ、クイッと瞬時に強く収縮して絞り込んでくる。
「あふぅ」
沙也もひかるの肉棒を根元まで膣に嵌め込むと、半眼の眼差しになって息子のペニスを貪る深い溜め息を漏らした。
舌を伸ばして上唇を舐める。ひかるのペニスを味わう淫らな顔つきだ。ペニスを玩具にして上から乗って挿入するのが好きな沙也である。
腰を上げていく。
ズヌヌ……。
固く勃起したひかるの肉棒が愛液でヌラヌラ光りながら、はみ出した二枚の襞びらの間から出てきた。
「いいわぁ」
感じた顔をして、沙也が腰を落とした。
ブジュッ。
「あおぉうぅぅ……」
唸るような喘ぎ声を口にこもらせて、また肉棒を深く体内に呑み込ませていく。お尻の柔らかい肉がひかるの腰骨を覆った。

「あンン。そ、そんなにギューッとお尻落として入れさせないでぇ」
ひかるは肉棒全体で沙也の細かい膣襞を感じた。ザワザワと押し寄せる快感でどうしても顎が上がってしまう。だから、弱音を吐くような、許しを請うような言葉が口を突いて出てしまうのだ。騎乗位は重い女の尻がのしかかってきて肉棒を挿入させられる逃れられないセックスとも言える。
沙也は腰を落としてひかるのペニスを根元まで没入させ、また、腰を上げる。
ズニュッ……ズヌルッ……。
どっしりした臀部の上下動を繰り返す。
「ひかるちゃんの……あう……おチンポが……はうぅ、子宮に当たってるわ」
沙也は少し視線を上げて、口を半開きにしている。
ひかるも沙也が言うように、先っぽがコリッと固い女の神秘の器官に衝突している感触を受け止めた。膣襞の絡みつきと摩擦の不気味な快感、ギュッと締まってくる強い膣力、そして今、尿道口を含む先っぽが当たって感じている子宮口の異物感。それら邪悪な快感が包茎ペニスを切なく昂らせる。
「恥ずかしいこと言わないでぇ……ああ、でも、ママの子宮、分かるよ……」
官能的な羞恥の中でつい正直に応えてしまう。カウパー腺液が尿道奥からジュッと

上昇してきた。
沙也は騎乗位で腰を上下させ、膣壁を使ってひかるのペニスを肉揉みしていく。クイクイ締める収縮力で肉棒を圧迫し、膣襞で卑猥な摩擦を加える。
小陰唇も充血してぽってり膨らんでいる。ひかるのペニスの両側で猥褻な花びらが開いていた。
沙也が腰の上下動のピッチを上げてきた。
ベッドがギシギシと激しく軋む。
腰が上下するたび、二つの肉房がゆさゆさ揺れる。
ズチュッ、ヌジュッ……。
ペニスとの摩擦が膣奥で肉の淫靡な音を返してくる。沙也の蜜壺がしとどに濡れ潤ってきた。
ひかるから飛沫が見えた。蜜壺に溜まっていた淫ら汁の量が多いようだ。ピュッとしぶき、ひかるのペニスを伝ってねっとり垂れてくる。
沙也は自分の豊乳を手で揉みながら、大きな臀部をひかるの上で踊らせた。
「あはぁあうぅぅ！」
淫らで官能的な甘い喘ぎ声を漏らす。

身体をやや前傾させた。
何をするのだろうと思ってひかるが見ていると、恥骨をグリグリ擦りつけてきた。クリトリスをひかるの陰毛に擦りつけて感じようとしていることが分かった。
「はううーっ！　ひかるちゃんの毛に擦れて、ママのクリちゃん、気持ちいいわぁ。固くて、大内のパパよりずっといい！」
沙也は淫乱な眼差しで、ひかるの顔を見て喘ぐ。故意に言葉に出して、とにかく若いペニスを肉壺で嬲り味わう。
血のつながりのない息子のペニスを肉壁で締めている。意識的に力を入れて、強い膣圧で絞り込んだ。
愛液がおびただしく溢れて、ひかるのペニスをヌラヌラと光らせている。
「男の子なら、おチンポを突き上げてきなさい」
沙也が命じた。
「ああう……」
ひかるはそうしようと思っていた。それが一瞬の遠慮があって求められるまでできなかったのだ。
腰に力を入れ、沙也の肉穴に向かって固く膨張した肉棒を突き上げた。

「はあうーっ。そ、そうよ、もっと突き上げて！」
沙也はひかるを犯すように味わうだけでなく、同時に下から突き上げさせてまるで奉仕させるように楽しむ。そんな沙也の淫欲はひかるとて分かっている。だが、ひかるはペニスの快感を貪るべく、無我夢中で強い膣圧の中を突き進んでいく。
「ママが上から腰を落とすのに合わせて、ひかるちゃんのおチンボの先で、ママの子宮口を仕留めるのよ――」
沙也はそう命じて、淫膣の穴を落下させる。それに合わせてひかるが下から突き上げた。
ズズニュッ！
沙也の言う通りタイミングが合うと、固く張ったひかるの亀頭が膣の行き止まりまで突き刺さった。
それを何度も繰り返す。ピン立ちのペニスが最奥の子宮口に衝突。また衝突。
「アアアアアーッ！　マ、ママの奥に嵌まってる……か、固くて、ヌルッとして、あ、熱いぃ……」
ひかるは沙也もはっとするような大きな喘ぎ声を喉の奥から奏でた。
嵌め込むたび、包皮が後退して亀頭が剥き出しになる。沙也の子宮口にグニュッと

先っぽの形を変形させて潜り込んだ。
「い、いいわぁ……ひかるちゃん、ペニスでママの子宮を感じてるのね。ママも感じてるのよ」
沙也はひかると母子相姦の淫らな思いを共有しようとする。
痛痒いほど勃起した仮性包茎のペニスは爆発寸前。敏感な包茎棒は快感のせいで、ひくっ、ひくっと、痙攣を起こし始めた。
ひかるは子宮に鈴口を吸い上げられる切ないほどの快感に打たれ、沙也はペニスで子宮口をこじ開けられて中出しの予感に震えた。
今にも射精へと持っていかれそうだ。ひかるは禁断の「継母姦」の射精から逃れられない。
「ぼ、僕、出ちゃう！」
ペニス深部で射精快感が生じた。
沙也の見下ろす眼が異様に光る。
「出しなさい。ママの膣と子宮でひかるちゃんの精液の味見をさせて！　ママの中にドバッと――」
「だめぇぇ……マ、ママの中に、ほんとに、出るぅ！」

「出せばいいのよ。ひかるちゃんのおチンポでママの女そのものを悦ばせて！」
ドビュルッ。
濁液を熱く発射した。ペニスが根元まで膣に没入し、亀頭はしっかりと子宮口に嵌まり込む。
「イク、出るっ！」
ずびゅびゅびゅっと、熱液が尿道を駆け上り、沙也の子宮の中へ直接射精されていく。
沙也は腰を上げ、ズンと、一気に下ろしてペニスを深く嵌めさせた。
ひかるの肉棒は再度子宮口に嵌まって、射精した。
「ウンはぁあああああーっ！」
亀頭から肉棒の胴、毛の生えた根元まで沙也の膣襞に擦られて、ペニスから腰肉まで快感が押し寄せ、痺れが走った。
括約筋でギュッと締められて射精暴発。何も考えられないイキ痴獄の快感で背中を痛いほど反らせた。
勃起したペニスを淫膣の力でクイクイ締められながら、精巣内の熱くなった種汁を、継母の胎内に吐き出していった。

「ひ、ひかるちゃんの射精……す、すごぉいぃ……イ、イク、イ、イクイク、イクゥーッ！」
沙也も血のつながりがないとは言え、息子の射精を子宮で感じた禁忌の快感で、はしたなくイキ声を奏でた。その声を自分で堪能しつつ、絶頂に達していった。
お互い感じている母子のタブーの肉交わりが、その快美感を極点まで高めたことは否めない。その意味で敏感な少年の包茎棒と熟した淫膣の擬似的近親相姦の相性はピッタリだった。
イキまくる快感によって雌肉の収縮が起こり、ペニスをきつく絞り込む。
「くはぁあうぅぅーっ！　ママ、僕……だめぇぇ……」
ひかるの絶頂も続く。継母の濡れ穴の奥深くに、ビュビュッと射精している。もう何を言っていいか分からない。
沙也は舌を伸ばせるだけ伸ばして上唇から鼻まで先端を突き出し、ひかるのペニスの脈動を味わっている。
「イクゥッ、ひかるちゃんの精液、もっとぉ！　はうぅ、来てぇ！」
射精を受け、両手で乳房を握りつぶし、淫らなイキ声をほとばしらせた。
アクメに達したあと、沙也はガクッと身体を落とした。

「アフッ、アフッ」
荒く息をする。
半眼に開いた眼でひかるを見る。イッただけに、満足そうな顔になる。
もう一度フッと大きく息をして、ゆっくり腰を上げた。
赤い肉穴から、射精後もまだ固さを失わないひかるのペニスが、ズポッと抜けて出た。
直後、膣穴から、ひかるが放出した白濁液がドロドロと流れ出してきた。
その濁液を沙也が指で掬って口に持っていき、赤い舌で舐めた。
「ひかるちゃんのおチンポ、ズボズボ嵌まって、思いきり射精したわね。ママ、締めながら、子宮でひかるちゃんの射精を受けちゃった。ほんとに奥まで疼かせてくれるいい子ね。うふふふ」
「ああ、ぼ、僕ぅ……」
セックスしたあとそんな卑猥なことを言われて、ひかるは何と言ったらいいか分からない。継母とは言え、沙也は母親であることに変わりはない。
しかし、母親だからこそ、異常なほどの快感と淫靡な悦楽がもたらされるのも誤魔化しようのない事実だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

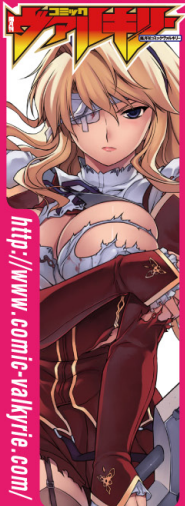
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！